
幸せ探しは屋上で。

山田 由々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せ探しは屋上で。

【Nコード】

N0079BA

【作者名】

山田 由々

【あらすじ】

高校生、北城はある日、自殺志願者に出会った。

ところが彼女は清らかな笑顔で、「生きている事を実感したい」と言う。

彼女の真意は？そして、平凡を望む北城の取った行動は？

(前書き)

初投稿です、山田と申します。

学園と銘打っておきながらもあまり学生らしくない面々がそろっておりませんが、彼らなりに頑張っていると思つので生暖かく見守ってやってください。

「幸せとは、主観に基づくこじ付けなのだよ。例えば君、今まで食べたことの無いくらい美味しい食事を取ったでしょう。幸せだと少しでも感じるかい？」

「まあ、感じるかもね。」

「じゃあ、その食事を一ヶ月取り続けたとしよう。やがて舌はその美味に慣れ、それが当然だと認識し始めるかもしれない。幸せは慣れてしまうものなのだよ。嬉々としていた筈の事柄は、無味乾燥なものへと変換される。」

「恒久的な幸せは無いの？」

「無い事はないさ。ただし」

「ただし？」

「それは、幻想と呼ぶことが多いがね。多少例外もあるが。」

六月、僕がこの学校に入学してから二ヶ月が経った。まだ完全に学校の空気に慣れていないけど、僕の努力の成果もあって友達は片手で数えることが出来る程度に収まっていた。まあ、当初の予定は指を折ったままの方が良かったんだけどそれはどうでも良い話。

とにかく、そんな六月。僕は一人の自殺願望者に出会った。日本人形のように綺麗な黒髪を腰まで垂らし、精悍な顔つきをした彼女は、弱くて、脆くて。でも、心の強い女性だった。

結果を此処で言ってしまうと、彼女は死んでいない。今だって僕の隣で静かに本を読んでいるし、この前買物に付き合わされた。でもそれは願望の消失ではなく

「またの機会があったらね。」

なんだそうだ。彼女は僕に向かつてついでに言った。

「良かったら、北城君も一緒にどう？」

「うーん、嬉しい誘いだけど。僕はまだ、やることがある気がするから。」

「そう、残念。」

彼女は笑っていた。

三日前

お昼休みに立ち入り禁止の屋上でお昼ご飯を食べるのは、僕の日課にしようと昨日決めた。気がかりなのは、今が梅雨時な事なんだけど、雨が降ったらそのとき考えよう。とにかく、今日は空が綺麗に青く染まっっていて、僕は青いドームの中で飼われているんじゃないかと錯覚した。まあ、冗談だけど。

自作のお弁当を半分程胃の中に詰めて、小さい卵焼きを咀嚼しようとしたその時、視界の隅で何かが動いた、女の人だ。黒い髪を風になびかせて何もせずに佇んでいた彼女を見て、立ち入り禁止の筈なんだけども。なんて注意はしないし、そもそも出来ないし、正直な話別に興味も湧かなかったから風景の一部として認識しておくことにした。つもりだった。

彼女と僕の間には落下防止用のフェンスがあった。僕に屋上のフェンスを乗り越えて足を投げ出しながらお弁当を食べる趣味はないので、どちらかといえば彼女のほうが身を投げ出しそうにしていた。実際そうなのかもしれない。

僕の存在には気が付いてないみたいだし、もしかしたら屋上の縁に立つことが彼女の趣味なのかもしれない。うん、冗談。

とりあえず、お弁当の中身を四分の一残して蓋をして、弁当箱をハンカチに包んでから床に置いた。起立、前進。目標は風と仲の良

さそうな彼女。

「そこ、危ないですよ。」

彼女は少し驚いたように振り返って、フェンス越しに返事をした。

「ええ、そうね。」

ずいぶんと冷静な御判断で。そんなこと言わないけど。

「落ちたら死ぬか、死ぬほど痛いと思いますよ。」

「そうでしょうね。」

・・・ああ、そうか。

「もしかして、落ちたら楽になる。とか考えてたりしますか？」

「そんなことないわ。」

彼女は屋上から見える景色を一瞥し、歩き始めた。進行方向には、穴の開いた金網があつて、彼女がスカートのままフェンスを乗り越えたのではないことが分かった。彼女は僕のそばに来て、緩やかに腕を組んだ。

「やつぱり駄目ね。意気地なしだから、私。」

「自殺ですか、流行ってますよね。」

「止めないの？」

「止めて欲しいんなら言って下さい。」

「じゃあ、お願いするわ。」

「勝手に死んでください。」

彼女は呆気にとられた顔をして、口に手を当てて上品に笑い出した。

「あなた、会話になってないわ。」

「すみません。コミュニケーション不足なもので。」

「面白いわね。」

「笑いを取るうとは思ってませんけど。」

「あら、ごめんなさい。でも、あなた変わってるわ。」

「よく言われます。」

笑い終えた彼女は僕を見て、話を続けた。

「自殺はいけない事だ。って思う？」

何らかの理由で自らの人生を終わらせる行為。それは僕にとって逃避にしか思えなかったけど。

「その人の価値観によりますけど、僕は非で。」

「勝手に死ね。って言うっておきながら？」

「人の決定に自分の意見を挟みこむ事は好きじゃないので。それに。」

僕が必死に止めても、僕の目の前で人生を終了させてしまった人も居るし。

「なんとなく、あなたは飛び降りないなって思いました。」

多分これが初めてじゃないんだろうな。

「いつも寸前まで行くのよ。ナイフを手首に当てて、暫く迷って止めたり。」

「お友達には止められませんでしたか？」

一般的にはこういう時止めるだろうし。

「止めが入る状況でそんな事しないわ。」

どうやら本気らしい。僕は後ろを向いて、お弁当の残りを食べようと歩き出した。

「僕はお昼ご飯を食べてたんです。だから此処で死なないで下さい。僕が困ります。」

「あなたが私を止めた理由はそれ？」

「はい。」

少しだけ残ったご飯と甘い卵焼き。ちょっと焼きすぎたウィンナーを食べていると、彼女が隣にやってきて座った。

「何で死を選ぶんですか？」

僕は何となく聞いた。それは、三年前に僕の手の届くところで自らの命を絶った彼女へ出来なかった質問。

そして、死を躊躇した彼女は答える。

「生きている事を確かめる為、かしら。」

「生の確認に、死ですか。」

「私は何の為に生きているんだろう。多分殆どの人が考えた事が

あると思うわ。答えは人それぞれだけど、私はそれを考えているうちに方向性を間違えたんでしょね。」

人事のように彼女は続ける。

「私は、今本当に生きているのか？」

人は何故生きるのか。僕も考えたことはある。途中で面倒くさくなって、適当に答えを作つてやめた。

つまり、死にたくないから生きている。という答えになつていない答え。だから単なる冗談だ。

彼女の場合、考え過ぎたのだろう。生の目的を考え、生そのものに疑念を抱いてしまった。・・・でも。」

「確かに、証明する方法はありません。」

心臓が動いている？

朝起きて夜寝る？

意思の疎通が出来る？

何の意味がある？

生きながら生を止めちゃった人とか、生きるのを止めても『意思が生きている』とか言われる人とかがいて、あやふやだ。

「そんな私でも、生きてるって実感する瞬間があるの。」

「死ぬ直前ですね。」

日頃気に留めない『死』を目前に置くことで温度差を確認する。

「まあ、単なる自己満足に過ぎないのだけれど。」

結局、精神論の答えは自分で勝手に決めるものだ。

チャイムが鳴つて、後五分で午後の授業が始まることを気付かされた。

「三条凜子よ。あなたは？」

「北城ミキです。」

「良かったら、お友達になりましょ。北城君。」

「・・・君？」

「自分の事を『僕』って言うてるでしょ？特に理由はないけど、何となくそつちの方が似合ってるわ。」

まあ、いいや。僕の性別なんて。

二日前

僕には小学生のときからの、友達と言うかそれ以上の存在で、付き合っていないけど好き合っている感じの存在が居る。

「ミキ君！昨日屋上行ったんでしょ？どうだった？」

死を望む人が居た。とは言わない。

「良い所だった。風が気持ち良かった。」

「じゃあ、私も行く！」

彼女は犀軒唯珂・・・因みに探偵で、彼女が所長である事務所に遊びに行ったことがあるけど、変な人達ばかりだったので此処での説明は避けてこう。そんな探偵は普段は何も考えていないんじゃないかと邪推するくらいに天真爛漫。でも、とあるスイッチを入れることにより人が変わる。ついでに、意外と普段から思考回路はシャープだ。唯珂は長いツイントールを揺らしながらすでに屋上へと向かって歩いていった。

もしかして、今日も居たりするのかな。

そして、予想は的中した。

「あら、北城君。」

「こんにちは、三条さん。」

フェンスを介していない状態で挨拶を交わし、三条さんが会話を開始する。

「今日も此処でお昼を食べるの？」

「はい。今日は二人で。」

「そちらの方は？」

「犀軒唯珂です！」

三条さんはやっぱり優雅に笑う

「元気がよくて可愛らしいわね。私は、」

「凜子さんですよね？たまに廊下で見ますよ。」

「あら、そうなの。私も有名になったものね。」

「凜子さんはこんなところで何してたんですか？」

「此処は見晴らしがいいから、少し出てみただけよ。二人をお邪魔しちゃ悪いから、私はもう行くわね。」

それじゃあ。といって三条さんは屋上を出て行った。そして、唯珂は

「・・・何してんの？」

自力で自らの首の骨を折ろうとしているようにしか見えないくらいに首を傾げていた。

「うーんとね、ちょっと考え事だよ。聞きたい？」

「聞いておこうかな。」

唯珂は心底疑問そうに言った。

「何で、凜子さんは私に嘔吐いたのになって、考えてた。・・・こいつ。」

「何でそう思うの？」

すると、唯珂は腕を組む。因みにこれがスイッチ。説明ごとをするときの癖でもある。

「なに、単純なとき。此処が立ち入り禁止だからだよ。」

「僕達だつて入ってるけど。」

「それは前提が違うのだよ、君。私達は生徒で」

唯珂は片目をつぶる。

「彼女は教師だ。見晴らしがいいから、という理由で禁止された区域に入る指導者がどこに居る？」

「ロマンチストだったりして。」

冗談だけ。

「単なるロマンチストだったら、君と交流があるわけ無いさ。自己紹介は、昨日したばかりだろう？」

何でそこまで知ってるんだ？

「『今日も』なんて分かりやすいヒントがあるんだ。昨日も彼女はここにいて、君にあった。何故打ち解けたのかは分からないが、景色を見ている人間に話しかける性格をした君ではないだろうに。」

「向こうから話しかけてきたかもよ？」

「話しかけられて本名を語るほど素直な性格でもないだろう、君は。」

最後だけ溜息混じりに言った。ああ、そうですよ。どうせ性格捻くれてますともさ。

唯珂とお昼を食べながら、思ったことは一つ。三条さんは、出会ってはいけない人に出会ってしまった。

つまり、犀軒唯珂に。

前日

雨が降っていた。

「今日は、屋上行けないね。ミキ君。」

「そうだね、唯珂。」

当日

三条凜子が、身を投げた。

翌日

圧倒的な白が支配する立方体の中に収容された、生命。願望に見放され明日に囚われたその命は虚しく儂く虚無であった。躊躇を乗り越えた先にあったものは虚空だったのかもしれないし充実だったのかもしれない。自縄自縛と自業自得を成し得た彼女は同時に自学習に成功したのかもしれない。自問自答を繰り返した結果が想像した結末で無いとしても、それが現実であって変更の許可は下りていない。何もかもが終わりを告げた今、自意識を奪回した彼女は何を思うだろうか。

「冗談じゃない。」

三日後

「何で飛び降りたんですか？」

「心配してくれた？」

「意外ですか？」

「だってあなた、他人がどうなろうと興味が無いような性格ですよ?。」

「ええ、それが他人であれば。です。」

「嬉しいことかしら。」

「ご自由に受け取ってもらって構いませんよ。で、何で自殺したんですか？未遂ですけど。」

「分かってるくせに。」

「真相は本人の口から聞きたい性格なんですよ。」

「・・・唯珂ちゃんに試されたって言うのかしら。私が落ちた日、唯珂ちゃんが一人で屋上に来たの。私はその日もフェンスの向こうに立って、いつも通りよ。躊躇してあきらめた私が振り向くと、そこに唯珂ちゃんが居たの。」

「腕を組んでましたか？」

「・・・？ええ、組んでたわ。それで、言われたの。『貴女にとつての生とは何か聞きたい。』って。」

「行動で答えたってことですか。」

「その通りよ。私自身が上手く理解できてないんだから、後は気の赴くままに動いた、そしたらこうなっちゃった。」

照れるように笑う三条さんは、僕に向かって疑念を吐き出した。

「それにしても、唯珂ちゃんは どうしてあんなこと聞いたのかしら。」

一週間後

立ち入り禁止になっていた原因の破れたフェンスを生徒と共に直していたら、前日が雨だったために足を滑らせて落下してしまった三条凜子さんは、右足に包帯をぐるぐる巻いて職場に復帰した。フェンスはどうやら他の先生によって直されたらしいから、三条さんがフェンス越しに見えることは多分もう無いと思う。

三条さんが唯珂に提出した疑問は、ちゃんと唯珂が説明した。

「私とミキ君が中学一年生のときに同じようなことがあったんです。その人は何も言わずに死んでしまったけれど、手紙を残してくれました。」

私は生きた。だから生き過ぎる前に死ぬ。

「さっぱり意味が分かりませんでした。私は凄くショックで落ち込みました。私はその人の為に何か出来なかったのだろうか、何かに気が付いてあげることができなかったのだろうか、って。だから正直自分で自らの人生を終わらせる人は苦手です。嫌な事を沢山思い出しますし。」

「じゃあ、何で・・・」

「単なる投影です。何となく似てたからです。もしかしたらこの

人なら、あの人と近い考えを持っているかもしれない。そう思ったんです。』

唯珂は俯き、反省するように言う。

『私、凜子さんに酷い事しました。あそこから落ちたら地面は花壇でした。なので前日に雨が降っていたから、ある程度の高さからなら落ちても大丈夫か確かめました。その後、凜子さんと会う少し前に、救急車を呼んでおきました。十分で来るといったので、私はすぐに凜子さんの所に行つて、わざと追い詰めるようなことを言いました。』

『私が飛ばない可能性は？』

『多分、無いと思います。今まで躊躇してきたのは、自問自答だったからなんだと思います。人から直接的な質問を投げかけられれば、多分あなたは何の迷いも無く自害行為に走る。そういう性格だと思つたんです。』

『参つたわね。その通りよ。流石、探偵さんね。』

唯珂は顎が外れたように口を開けた。

『何で知ってるんですか？』

『さあ、当ててみたら？探偵さん。』

・・・ごめんね、唯珂。

二週間後

「・・・例外つて？」

「死を幸せだと捉えれば、それは恒久どころか永久だ。」

「それつて・・・。」

「『生き過ぎないうちに死ぬ。』彼女は生からの乖離が唯一の幸せだと考えてしまったのかもしいないな。」

「唯珂は・・・。」

「何だ？」

「唯珂は、何の為に生きてる？」

「良い質問だ。私はこう考えているよ。」

「何？聞きたい。」

「慣れた幸せを再確認し、飽きた幸せの代用品をとる幸せを探す事こそが、日々を幸せするのだよ。」

「・・・だから？」

「未確認の事柄は嫌いだ、反吐が出る。そして使えなくなったものを放っておくのも嫌気が差す、手に入りにくくても、努力すればいいと思ってる。だから、確認し、手に入れるまで死ねないさ。」

それなら、僕は願おう。

慣れても良い、飽きられても良い。

君の幸せの一部になりたい。

「ねえ、唯珂。」

「何？」

「人を好きになることは、案外慣れないものだよ。」

「・・・それ、誰のこと？」

「・・・さあね。」

人を好きになんかになったことの無い僕と唯珂は、お互いをどう思ってるか本人たちでさえ分からない。

あ、それを分かるようになるのが、幸せってことなのかな。

何だか僕らしくないから、そんな事を考えるのはもうやめにしよう。

(後書き)

探偵関係ないじゃんとか、そんなツッコミは聞こえなかったふりをしますのでもっと大きな声で言ってみてください。

唯珂の探偵っぽい話もかいてみたいものです。

唯珂「え、探偵設定なのに考えてないの？」

「何となく格好良かったので。」

唯珂「私って一体……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0079ba/>

幸せ探しは屋上で。

2011年12月31日03時51分発行